

日展に挑む作家にとって「特選」は大きな目標だ。改組新第5回日展では県内から、3人が受賞し、富山展に作品が並ぶ。作家として一つの節目を迎えた3人に、日展の魅力を聞いた。（敬称略）（文化部・米沢慎一郎）【本記1面】

特選作家に聞く日展の魅力



「花水木」

風を磨ぎ、大学2年から入選を重ねてきた。

会社勤めをしながら、帰宅後の短い時間に制作する。「他人に頼まれたものは作りたくないから、プロの作家には向いてな

続けたい」と話す。

彫刻に初めて触れたのは高校時代。井波高校で非常勤講師を務めていた日展作家の横山丈樹と出会い、創作の楽しさを知った。熊本の崇城大と同大大学院で教わった教授も「日展系で、出品は自然な流れだった。会場に並ぶ自作を客観的に眺めて作風を磨き、大学2年から入選を重ねてきた。

個性を打ち出す舞台

感があると評価された。

今後は無鑑査となり、特選を取ることはできない。それでも「3度目の特選を取るつもりで作る」と意気込む。

写真性の強い作品が多いことも自分に合っているという。似通ったものばかり、というわけではない。「同じモデルの同じポーズを基に作っても、全く別のものでできる。それだけ人間の目というのは違うし、表現したい思いも異なる」と言う。

長年テーマとしてきたのは「母なる大地」。ごつごつとした岩の塊のような女性の塑像は、均整の取れた女性像が中心の日展で異彩を放ってきた。花の優しい香りをイメージした受賞作「花水木」も、力強い生命感があると評価された。

彫刻 森田一成(富山)



「日展の会場は自作を客観視する場所」と語る森田＝富山市上大久保